

目で見ると 碧海の100年

この資料は「目で見ると碧海の100年」からの抜粋である。

目で見ると碧海の100年

発行日：1992年4月17日、監修：神谷 素光 発行人：森田 彰

発行所：株式会社 郷土出版社

ISBN：ISBN4-87670-025-7 C0021 P11000E

「目で見ると碧海の100年」の80頁、81頁に「愛知県立農林学校と山崎延吉」と題して以下の記述がある。

明治33年（1900）当時、安城村から郡会に選出されていた岡田菊次郎は安城村へ農林学校を誘致し、明治34年10月に愛知県立農林学校を創立した。現在の愛知県立安城農林高等学校の前身である。

本校の初代校長として、わずか29歳で赴任したのが山崎延吉である。山崎は学内だけにとどまらず、農村啓蒙のために全国を行脚し、直接農民に接して農村の青年たちとともに、農村教育のために尽力した。全村学校運動の展開はその1例である。このような青年校長を中心に優秀な人材が集まり、農林学校の基礎が固まった。

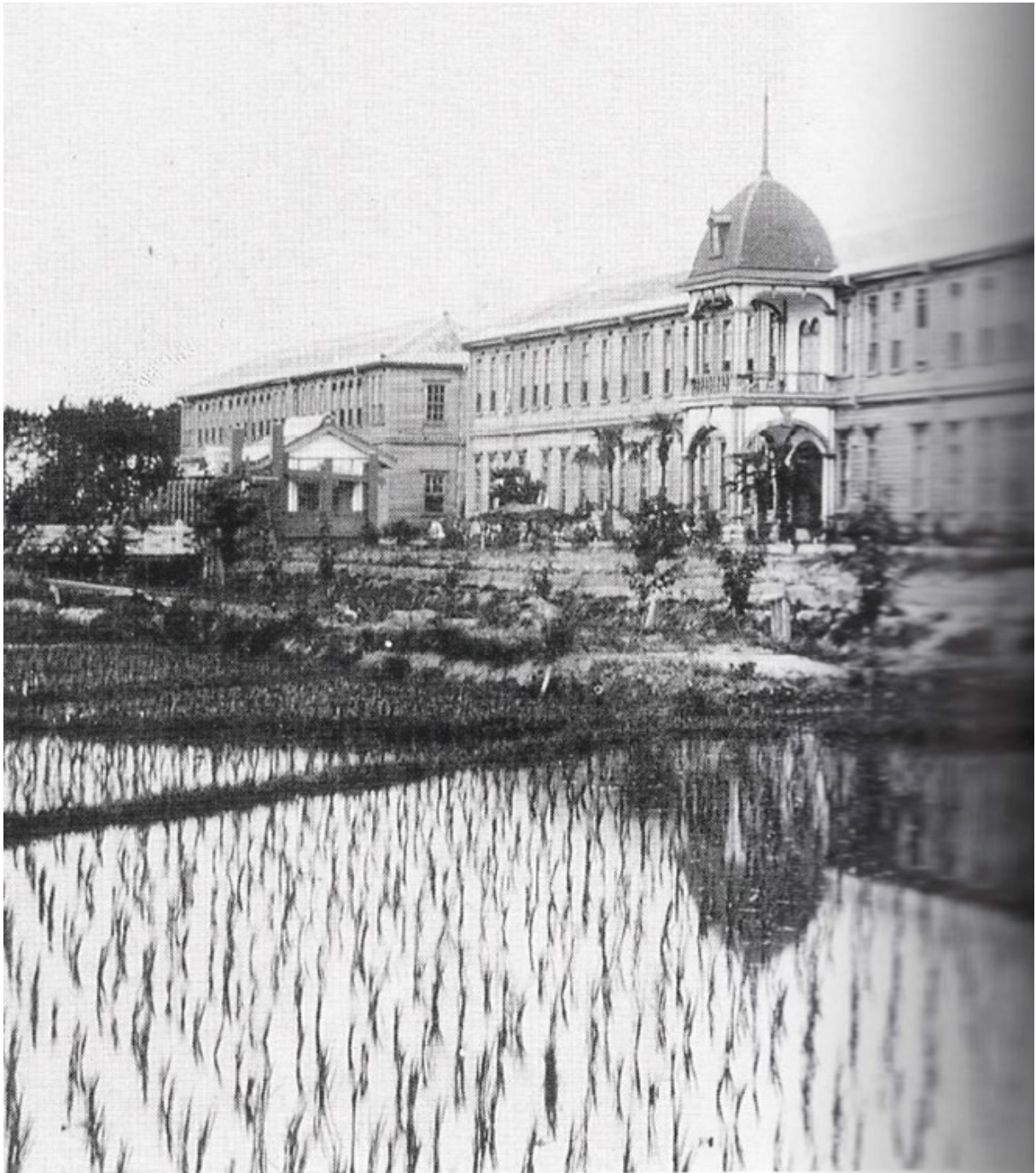
山崎の教育方針は、勤労を以て身を馴らし、古武士の風を養うことであった。武士道即農民道である。また、山崎は開校当初から、学校を農民のために開放し、訪ねてくる者すべてを生徒とした。その上、中央の名士を常に学校へ招いて講演会を開き、人物の教育に務めた。

同時に、安城農林学校は、農民、農村教育の場ともされ、県下農村文化の源泉となり、日本のデンマークをリードした。



山崎延吉の名講演会を聴く（安城市・大正末年）

県立農林学校の初代校長が山崎延吉であった。彼は県立農事試験場長も兼務し、多角形農業を提唱して全国を講演して回った。講演回数は実に約1万5000回にも及んだという。



水田に映る安城農林学校（安城市池浦町・大正時代）

安城農林学校は明治34年10月に設立され、県下の農村文化の源になった。「日本のデンマーク」の象徴的存在でもあった。



桜咲く有始有終橋（安城市池浦町・昭和10年）

本館正面玄関前にある有始有終橋は同校の創立精神を伝えるものとして名付けられた。姿形は変えつつも今も昔と変わることなく同校の歴史を亭々として語り続けている。



実習農場で恩師と記念撮影（安城市池浦町・明治37年）

開校以来の恩師が同校を去ることになり、その時に撮った記念写真と伝えられる。実習農場の造成には延べ1100人の労力が費やされ、まさに生徒と職員の汗の結晶であった。